

大宰府アカデミー・令和編 第19講 令和6年10月16日(水)質問及び回答(Q&A)

「古都大宰府の展開～太宰府博覧会と菅公一千年祭～」

講師・回答： 日比野 利信先生(北九州市立自然史・歴史博物館歴史課長)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 先生のお話にあった「アジアに開かれた国際都市」としての福岡市の発展についてお尋ねします。

現在でも九州の税関（本関）は門司と長崎に置かれています。輸出入が海上輸送中心の時代は北九州、長崎が中心都市（港）であったものが、航空輸送の需要が増大し始めた時期に主要空港が置かれた福岡市に移行したという理解でよろしいですか。

A/ 回答

明治22年（1889）に門司港が「特別輸出港」（米・麦・麦粉・石炭・硫黄の5品目を輸出できる）に指定されると、長崎税関門司出張所が開所しました。その後、税関支署を経て、明治42年（1909）に門司税関が開設されました。ご指摘のとおり、九州に所在する税関は長崎税関と門司税関の2ヶ所ですが、これは近代日本の国際貿易（港）の発展という歴史的経緯があつてのことです。

「アジアに開かれた国際都市」という言葉は、かつては門司（関門海峡）や長崎で言われていましたが、現在は福岡市で最もよく用いられる言葉となっています。しかし具体的な指標や基準があつて認定されるものではありません。航空路の開通と空港の開港が福岡市にとって極めて大きな出来事であつたことは間違いありませんが、貨物輸送という点では現在でも海上輸送が中心です。「航空輸送の需要が増大」したことによって「移行した」というより、「空都」として福岡市が浮上して、九州における拠点性が高まっていくなかで、福岡市が自他ともに「アジアに開かれた国際都市」として認めるようになっていったと考えた方がよいと思います。その際に、古代～中世の博多の歴史がしきりに引用されることになりました。

Q/ 先生のお話のなかで、岡倉天心の「九州博物館設置の必要」への言及がありました。しばしばこれが現在の九州国立博物館の原点といわれますが、その博物館は太宰府市にあります。では岡倉は「九州博物館」の設置場所として具体的にどこかを想定していたのでしょうか。

A/ 回答

岡倉天心が「九州博物館設置の必要」(『福岡日日新聞』明治32年2月8日)を語ったのは、福岡市の「博多川端町大黒屋」で取材を受けた際のことでした。そのなかで、天心は「九州博物館の位置に付ては余は当地こそ尤も適当なりと認む」と述べ、その理由を「美術の嗜好なる者は富の程度に依って増進するものなれば当地の如き天然の良産を有して将来に殷風の望みある土地に設置するは向後益々、盛大を致たす可きの望あればなり」と論じています。天心は九州国立博物館の建設地を福岡市・博多と想定していることとなります。

ですから、天心にとって「九州博物館」を太宰府に建設することは前提ではなかったこととなりますが、江藤正澄の「鎮西博物館」構想(明治20年代後半)や菅公一千年祭開催(明治35年)と近い時期の発言であり、その後の第13回九州沖縄八県聯合共進会(明治43年)を含めて、私が述べたように福岡(市)と太宰府の密接不可分な関係性(ある種の一体性)を前提として考えるとき、福岡(県)一太宰府を想定した九州国立博物館の建設(誘致)運動のなかで、天心の発言がしきりに引用されることになったのだと思います。

※ ご質問ありがとうございました。